

古く一里



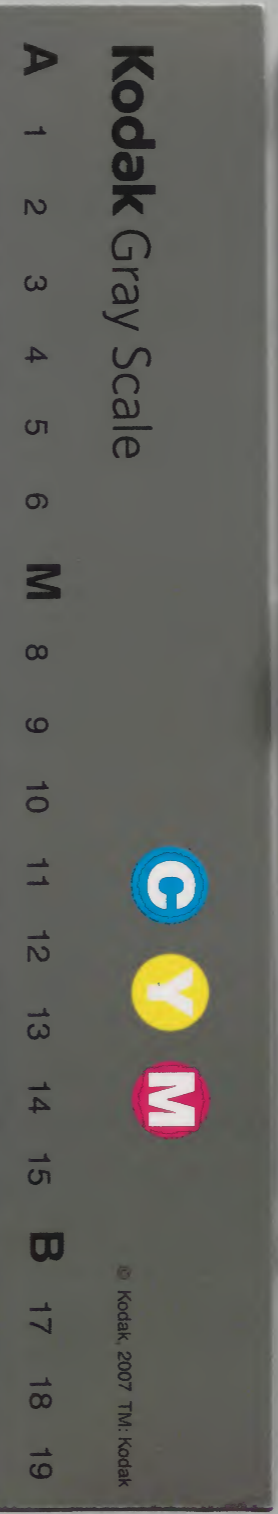
和書門			
一	二	三	四
り	り	り	り
冊	架	函	號

内閣文庫			
二	三	四	五
函	冊	架	類
〇	〇	〇	〇

(三九七)

内閣文庫			
番號	和	28420	
冊數	100 (93)		
函號	211	300	

九十三





明治三十三年購求



鹽尻卷之九十三

異本以尻書後



今川了俊

孔子の像涉製和歌

古人村務詩句

優人祝漢貞

太郎木郎の稱

才能見於辭句

兵具輕重長短

靈屋

餅

日月食

建安張氏曰

般火

方相魁頭假面

花名并浪の歌

益田涉社

防人部領

鞠の神

祀關村像始

時憲曆欠頁曆

笠土唐山字老の別



馬生人

秋海棠

神國

肖柏

春日社四座

地名漢文字

禮捨別離

創子

雲居寺の存否

糸巻院殿遺蹟遊々後清佛事等の記

知君清談表紙清早世末の事

眼鏡

何異孫十一徑同對一曰

黃蘗山六世子歎寂

敬義存熱田社詣

後水尾院五曲之清製

文仙りま行の体あり

日安寺修民各洋

棋及四天王寺西門の額

春日社神異

徳友の清嗣末の事

立巻口号

謝龍和尚詩

年暮雷雨日連歌

龍恩盛衰

歳暮若松風の秋

除夜の巻末を以

○今川の道了後者好事の人也常々和歌を詠み
治承の為秀の詩を著しけり此の詩は
中々公あふ友にけり世にけり
秋の表すかゝ後普光墨守棋改良基分り連歌の
此の詩を以て得るはるる治承為尹道と書し
をまゝいへり人此の詩もあつたりは存書抄
に後形抄より書きたりは後系融院の天覧
よむとて感し下きけり云々

誰か心に拾はるる心相安の浦

あふまぬおのころかかき

と海製をり下はせりるる此書作之の拍いと多く

あり言夢抄を人々も彼入道の巻也

○建安張氏曰凡有君道故利建侯蒙有師道故童蒙求我天地既位君師立矣 易集成

愚按乾天坤地人所知而凡蒙之為君師也先人未諳夫有天地而後有人必有上下之分而始君道立焉君必治民而教之以孝弟也君師固不有二矣尊而為君之親而為師之易也貫天地包万物其旨深矣哉

○太上皇 百十三代 孔子の傳を授けられたる御製

そはのまをうけのまをんはをいふ
四をよいふをんをいふ

後水尾院、湯板を奉らせ給ふ

君の心にまよふ御は世の板

たのむくは御はきり未も凡そ

湯あり 前太上天皇

はかふも御は板も語りけり

君のこゝろをまよふ御をむ

○花火 異称般火と云ふ新裁萬葉全書廿四巻に

多くの世をり

○瀛奎律體よ古人の詩句の法よ寸分はゆるぎなく

記す、美よ、歌人の及ぶ事少あり、改む、中よ、ときく、おもしろ、是、作ら、事、記、改

耿萍云

家貧董僕慢

官罷友朋疎

陳后山云

月到台家靜

林昏一鳥飯

劉賓客云

寒樹鳥初動

霜橋人未行

張宛丘云

清香侵硯水

寒影伴書燈

王右丞云

牧童望村去

田犬隨人還

范石湖云

月從雪後皆奇夜 天向梅邊有別春

雷松云

汲水疑山動 揚帆覺岸行

外系數以程多一有卷之終了子可也

○方相魍魎假面我邦神社有藏之者名曰猿田彦
之面固附會也然按類書纂要方相罔跡神也又
曰陰道人也云々我猿田彦太神罔路而導天孫
故記之乎我尾州大國天神社有稱司宮神假面
式曰猿田彦祠官甚畏之蓋是姓昔儼鬼所蒙方
相之假面也誤曰司宮神也司宮神又書主宮神
疑三狐神之訛言乎俗巫以三狐神書社宮神等

則祢三郎如張易之昌宗祢三郎六郎本朝光孝
帝三子祢太郎二郎三郎滋野貞主祢滋二在原
業平祢在五在武家則源賴義三子祢太郎二郎

三郎 養峰文集
十八記

太郎二郎等之祢始唐高祖之子而我朝起于
炎李天皇之皇子中世以此分嫡庶其後不嫡
而祢太郎身伯而云四郎五郎自此名分大混
雜矣且源平藤橘清中菅江等諸姓者蒙郎祢
源太郎平二郎等是亦源氏而^祢平太郎平家而
祢藤太郎類皆季世不^祢名祢也况不補任之
身而祢官号者雖謂流風時俗獨不可草之然

有志道之士豈隨之乎又名字昔祢名某字某
若所謂菅家道真名而其字三也中世以源太
郎平二郎等為字見盛衰記後世以祢号之氏
曰名字可謂誤矣近年書苗字者附會文字而
不古也嗚呼織田豐臣起於匹夫恣兵馬之權
不敢慕先世流風改衣服名号失其本而大變
國故以此近世人大槩元不蒙服足不着襪言
語文字亦習鄙俗此時雖與君子而草之容易
乎然至尊在上而不失名位民未^在祢所賴人
性之善不易古今耳

○
考の如おのきをいふこと
は田をいふこと

の非もきりせく 尾州中島郡國衙在益田郷有
益田村名傳云此所古有益田神社有八幡社赤
漆衛門家集云益田の涉社より一所あるを
小非まとせりとあり此刻瀧川尾州小
あふ此日なり瀧川を大江匡衡の室也匡衡為
任尾張守衛門隨之ちり

○薛文清公曰人有才能而見於辭貌者小也可知
嗚呼天下之事皆我分内之事豈以功能誇人况
記片文双字以充人乎今學者互以為自己即人
之師而不欲以友義交之動則以孟子待諸侯之
事籍口謀就已来見但有實德則不招而朋自来

学花柳無私而人固為未看自矜自代者皆妄而
已

○相撲ませきま六才は後は秘ひありり按あ才さりに万ま年ねん集しゆの
二十に防せき人モリ鄭コト領リといはるは國くによりり召まさりては相撲ま人にの
事ことありと解とれんとしては世よにまさりては是このは是このは
出いるはなりなり

○或人具足者の或を回侍くわい且かつ禮れいの古こ實じつ妙めう人にんを壽じゆ
ららはは侍しりしほほくく今いま侍してはきき子こもも侍しりし孫まごをを代しろ
かかとと考かへしてはるる趣しゆををせしゆゆのの侍しりしはは是このは
物の具の輕重より弓刀の長短ちやうたたるる所ところ小こなりりては必
しもて定さだめめられしし以も昔むかし侍しりし本もと重おも鑑かん山さんのの本もと坂さか一いつ村むら建けん仁にん
三年

父の禪門

左五門尉高細也
武切按群の老若

と謔を凡そ侍りては禪門

然して必語重經退々後光經

左五門尉

細尉

此二人の重經
の弟なり

と禪門の如くして重經を今度かあは

討免すして西息を成を相して父禪門曰山徒

の合戦大かき歩け辛きとて終りよすあひの製

多き重く凡そ且弓も長山とをり山徒さき

地ふおおむせはをけして重經より行かまを

とつて凡そ甲冑弓矢籠衣帯すも方と時交位の

用不用ありてを知らずと申しては太平の代大

緊在歎を先して武勇の成を却りての製を

多し吾子夫思をたせ

○或人同年辰の鞠始りて申の日に月ゆりて何の禮を

曰諸神はは京師中の海門西の洞窟を名滋野井

の社三所は是鞠神なり

- 一 計紫林
- 二 春陽花
- 三 樹尊

形は猿額金毛のふ多ありの上は神名をあらは

申の日記氏とんくしてを念ふ初鞠の件

の目を用ゆりて是を以てと

按ずるに鞠の神をえたり淫祀をたは初好事

の人なり初は後式内外の神と記してか

しこの所は多し因也

○高貴牌子を安在する堂を靈屋と名りて世の稱

かゝる人あり終らば常花物なりと云は保二年
十二月十五日煥子崩す〜の事いひく多野の南
二丁〜の事あり〜の事あり〜
つぎ〜の事あり〜
院の法より此号あり〜
多きところ〜印塔の精を其靈房に唐あり
祖也ふ似を判

○ 近世明僧小園の像を園〜 祥信は加
蓋形〜次按方に源為氏公吉慶よりて園
相の像を元朝より洛東大身寺より出宗め祠
ら〜〜 彼寺は極起小あり 是は我國の習

〜〜〜

○ 餅を粉麵之資也我國多為稻餅混之謂其能
毒者可笑之もちこめのもちハ資の字〜 祿の
もちハ餅本の字なり 稻ハもちこめの事〜 稻餅
〜餅せらるる餅の餅〜餅也

○ 清朝の康熙三十七年戊寅我元福の歴を凡る小
二至及び月の大小を〜
作りいり半〜 津田氏の作り〜
時憲曆の節氣日行の盈縮小〜
家名書歴い〜
〜中〜

皆屬考其意ある事たりと云

○日月食 陳氏曰曆家推算專以此定疎密本不足為變異但天文方遇此際又為陰陽厄會故聖人畏之云々按日食為月掩而如虧月食日与月相對而中間有地球隔日光則月即食食處是地影也或人曰曆家推日月交會定食者皆朔望之際也然史書亦載他日所載史者多以薄食前者必朔望之際決無他日所載史者多以薄食前漢書天文志曰日月薄食孟康曰日月無光曰薄京房曰赤黃為薄韻會曰不交而食曰薄韋昭曰氣注迫之為薄云々然則薄固不日月交會昔時

天文学不詳明故以薄為實食謂之變異耳以陳氏言則知本不變異只聖人畏其厄會是足破了今古疑議耳

○梵人別音在音不在字華人別字在字不在音梵人長于音所傳從聞入華人從見入故以識字為賢知云々震沢長語竺土唐山字音の別斯如云々但梵字の行方多て字多含而隱情と通す方也

○秦孝公二十一年有馬生人占曰諸畜生非其類子孫必有非其生者至始皇果呂不韋子ナリ

集異志云々ナリ武后の時井水変ナリ云々

の二十二字は倭歌の体也初たりりり武尊の歌
はく成をとも〜以宮酢姫を棄〜熱田の和魂を
〜何〜新治十の字の涉〜の〜連の権樂也
りり謹くお〜の志を〜体〜て武尊の用也蓋〜
剣ハ二首の表乃神乃武

○春日本見屋命一座後秘祭三神為四座其故如
何曰按大鏡鎌足大臣誕于常陸國鹿島神社其
本居之神也於此地祭祖神見屋命故上世新帝
即位則遣幣使於鹿島立后任大臣亦奉幣神護
景雲二年以鹿島及香取之太神祭之春日地可
謂上寄宿神也其若姬太神者不知其故書以待

君子之言耳

○後水尾院五典之御製

君臣有義

あまのつとめりりあまのつとめりり

いづれは水の玉も山も

父子有親

雲井いり海色小如き入森は也

子をおいり落を柱をとも〜か

夫婦有別

あまのつとめりりあまのつとめりり

あまのつとめりりあまのつとめりり

是交加生死岸頭

語類八十七

凡そ節樂を和也然るも後とて是便私の
豈と地節文ありて和未たりふ似侍らん後
世樂を淫靡の弊に流す礼ハ繁多の類ふ
歩ふ神社の祭祀古きを侍るゝいふ安らふ
自節ふありて煩くかゝ人凡そ和未は
後の事と好む債親をのこ先をすんれぬき
新為の附ふあるは是といふ一ふかひり法
のこかひり凡そ時々の分弁なく自方一人若
識りたやのいふはははははは

○ 神靈を敬くをさきく物とてりこころは侍

らふ亦語を交ふかゝん今國家の尊神 東照宮
も越ふを好し然るも日光山の御幸に委民拜及
も好む一或は農具を執りて午睡するは
格法の神道者信者なり凡そ大に忙しん人の
台徳公の作も神社に委民志すゝむもあはれ
ゆゑに恙廢ふ到るゝかゝ日光山公よりて緇
素縹民の祭詣をわゝゝありは是ハ伊勢太
神史のおほやけなるいふあり者も恙かき法
門の首事とて侍りなく死してこそ神を志すゝ
あつゝおほく亦自善信もあつゝ七新
奉ふ好しとてくも格法をて人をさきけせん

とせん神をたもつて安んじりて

○ 創子 今を刑殺する屠者なり我國刑戮のよし
あり付尸を縛りし首を棄てりしを其の根
存ハ穢多の穢殺して一を法ハ其の法は是と
稱せり

○ 或同棋州四天王寺西門の影と世伝山野道風の
多記とふ按ずるに吾徳田春敵門の影と筆勢
同の如く此古歌田島祇沙の如く曰天王寺の影を
家の影とあり道風とありは是聖徳太子の真跡なり天王寺
の古記を按ずるに寺に太子三侍の筆を記す
一あり所謂三体とい

一曰 疏 神文の書也 二曰 碑 龜井の碑也 三曰 額 西門鳥井の額也

此三侍の中疏と碑といふははるばる今龜井の
石中もあり龜井に彼碑文の臺石なりといふ具
張本註聚 伊波古抄唐の懷素の序文よん

○ 百練抄も言を 号勝庵の抄 洛陽の大佛の
のうらみなり者洛陽の大佛の額に古書
よんをたかりて尖の大像の額にありて曰予
の百練抄なりといふは是なり是なり
ありそのかゝる洛東法鏡寺の毘盧舍那佛の三
丈二尺夾侍 佐藤の四仏 各二丈梵經各九尺四天王尺三
漢巻の額也二丈普賢文殊各丈六弥陀九尺

○ 八月十九日 未下刻 先公の冥極せしむるに 本号位 洪水にて

御の法家人甲斐志き法運に年より修るもゆかり

おき世のすまひありて修る建中寺の法堂に頒

し奉り朝夕感奠し六時勤行ありし十八日

辰刻 大尊を葬場より法にまひて 金色三尺益 徳を修るに

おんをきく
おんしきく

鎖龕 壽經寺 起龕 遍照院

本尊 金色三尺の阿
弥陀仏形圖 誓願寺

御牌子 光照寺 尊湯 西蓮寺

尊茶 清安寺 念誦 清淨寺

洒水 光明寺
梅香院

其他出世僧侶名目以列 西堂志存
又今

導師建中寺貫首 大下 維那 宗心院

安葬の法財を相應寺大森寺性高院高岳院

事を修 空然に有自きししを以て世法法講に

圓覚院殿前黃門從三品賢者知紹源立大居士

と号し奉る 系是院の法名に東於牛島弘福寺の方丈
ありしをまふせりしなり 哀哉

きけりしと山城の法事ありしを以てかくても

おんをきくしや夢幻の身に若きもいふに

のよきは黄泉の法上遷変みりしを以て

法徳を修る因修し群昏のあきりて

獨りて以て法を圓覺といひて名滿の法に

フ法あり、靈明具照、豈分あまらあらんや、
陀十劫の光臨園と十界の依心と包身と百倍
の化光普六趣の若身を照破し、流すんを啓
し、おとすんも思ひ奉りし

心帶真慈港 光念法界園

無縁能撰物 有相定非難

と心との誦し、侍りし、其夜の月夜を照く

ほきんこと、梅の影りも、まらき

ふかき月と、まらき、ふかき月影

妙年が土浦侍従お後ちと上使し、て購銀一石

枚をよとせり江戸の法鏡、同日一日大衆建中兼

若小の道場二百二十日、初夜勤行、おま、ま、辰時、ふらり、夕刻の法

談經初り侍り、初君法代糸糸あり

咲系より、ふらり、願写瑞祥院の大夫へ、女言の使

法極懺鬼本壽院、女四日、懺偶、雨少おま、り、法

道善松食、女言より、大おま、り、及房抄、まらり

法道福松食

女言懺改家、り、法寺、法供、おん、侍り

因小法法法連枝、おん、使、おん、り、おん、法、おん、香、おん、

五七日法誦經二百部、出僧二百三十日、但州、且、万五郎、且

り、法道福、六、七、日、梅昌院、尼、公、り、法佛事、出僧

三十日、七、日、及、卒、哭、の、法、忌、百、日、也、共、よ、法、談、經、二百、部、出、僧、二

右賢宮内親王

三部經

右鷹司の系君

三部經

右九條の系君

沙汰物在り、沙納經不勤仕

信濃少治大夫
檢少将

銀青光祿大夫龍作源公者當世懿親武家俊傑
尾陽侯源敬公曾孫幼繼封籍身居顯官守世及
之訓著似讀之卷善最樂恭謙和順金鑿其操鸞
鳳其姿德音如斯名位如斯雖得人爵未得天爵

今茲七月廿六日薨于正寢年二十五嗚呼悲哉
惜哉若保天年則其遠大不可測知為僕祖林忠
出入 敬公之門券遇最渥創建聖堂于林忠別
莊棟梁高聳禮器悉備春秋二仲祭祀無闕顧夫
非 敬公之盛筵乎 龍作公修其旧因黃堂下
榻厚意一亭飽荷盛眷屢携二子近世座講席或
陪杖屨散步園中或觀劍馬逍遙場中雲龍逐影
水魚通情於是乎不堪慟哭謹賦一律以表微哀

藩屏盤石更皆非

武藝英姿到德威

漢殿論經搜旧籍

梁園珥冊忘心機

麟眸失影知何處

龍種乘雲長不歸

金室空存龜紐絕 西風吹淚濕人衣
正德三年八月日 大學頭藤信篤謹識

正德三年七月二十六日 尾陽侯黃門源君薨
去身居貴戚之上齡及五旬之半天哉命哉謂之
何哉如僕屢應佳招近拜 尊容恩遇之渥何日
忘乎 君若保餘齡長治封國則河間王之學術
東平王之寬仁可以期焉可以待焉嗚呼此年何
年乎此日何日乎為世為國不堪悲泣也謹賦輓
詞以表微忱

憶昨逍遙錦繡筵 威容威望兩相全

黃門貴美唯留位 素月沒光空仰天
千里良駒才已盡 十枝若水影難連
州民懷德不能忘 餘得二南教化傳
林信元拜書

正德三年七月廿六日 宗藩尾陽侯銀青光祿
黃門源公薨嗚呼為國家可長大息哉僕亦得公
之顧遇哀情殊切因賦奉吊

自是神堯後 由来公子祥
英姿千里去 雋望一朝亡
宗室曾後表 世家唯金章

侍の先公法華央の忌辰をふしすつせきうめして
ゆぐり好く法事しき法事し思ひつけぬ法経堂
も老の身も岡をわすれふつけんをいふか
しきもつきの侍り世のさく然好くを先
き世ありし末の居存はあつてこそかきし
りもく泡沫のあつたをせはあを中へすす
りもを駿馬大目とせつふかき侍りもい
たやいしつふ色より車林もや陰しき
能をワキモ モナユルニタラス 権腕校郎のよ
名指利つて立歩り侍りあはれか
およそい世常の福者志きりふかりし
屠者

の羊 あしはあゆむを思ひ立かてきき
祢泉下を全有侍りし息つてはあま
後の世も原はしき波流き必輪回し地を
空しく土もあはれ心もあはれ身を
とせのまもりしを思ひわすれ
たんすの魂をかづりし身もあはれ
へあんのりき法事のあやまら
よあけいしき事の日あはれ
をたきしき裝飾のしきき
まのりあはれしき思ひ
たはれ等いしきしき

定住小乃々ふつきく物伴の影をすすめたり
いさよく淫世をのりき侍をく精もあかしく
わいて眼前の世を常をりんくあやふく
社のおもひふりかきくも鳴咽照界を交ひりて
常住の地ありて生形多くくく永存の嘆あり
るれ若海波浪高しといふまは月樂土の
彼岸くよりき生死郷里をたり誰の心を
涅槃の心結く導く人二嵐の心をくく事
を扱をすくは百年瞬目の中より身く物羊の
命を造りし若舟く若くは一羽弾指の間小
舟の人も退く往昔をかりりくは若く若の種子

かくをんく来報をおもくも三毒の根本深く
白髪も黄介の以ても後世の毒癪の名門の人も
簡事外東岱の霞終くせ少の枯骨を御
少芒の家もく若徒の魂魄を初人をく史を
く人といふくも唯徒は旧名をのりて
いつり昔はつりて成は侍りてあたまは若く若
たりの五種も浄の心をすれ三輪法浄の果
を初をりて若く若く生死九識冥因の長衣い
よく因縁の縁をすくはくもあま初成是
の慈光若く西邁の法をすくもあま初成是
多く石控の信力を成す順破成佛の正業は

多能涉淡... 法月忌初... 涉然...
きてこそはせぬ

警頼の中... 世の式... 法... 公私...
つら... 世の... 立... 事...
か... 法... 奉... 無垢... 巖...
光一念及一時普照... 諸佛會利益諸群生...
と公よ... 大... 徳力... 成... 念...
侍... 旋... 歌... 念...

あり... 世... 晴...

雲... 西... 山... 端

月一時

夢殘驚朔風 從月非忽々

鳴雁迷孤影 雪花慘淡中

十一月九日 紀伊徳川前少府監 源多後 大樹よ

參後從三位 涉... 曲... 上... 供...
土... 妙... 閑...

仲冬 少 少... 從四位下大陽也 法嗣封上供

井上河内守正時 久世大和守重之 通頭祖臣松平 且法... 徳

川... 上... 日... 柳... 營...
の... 世... 法... 謝...

公ハ元禄五年壬申二月廿日法池生 法池云ハ乃ハ法方吉田氏ノ女今ハ泉光

後ハ正徳二年壬辰三月東都ニ入り二日法教塔

十日法省府四月廿二日幕下ノ法池老幼湯見あり

松州云也 五月廿二日初日 大樹ノ乃ニ入リ六月

十号従四位下左近衛少将兼大隅守を物カシ敷

系族ノ法社使 己ノ月 河村九郎彦次

正徳三年癸巳十二月十号法嗣未ノ御賀船延ハ禮

使吉原甚老丈付治

四月十号 大樹涉禪字涉授與孫継友ハ

同日従三位右近衛権中将公柳子ノ乃ニ入リ六月

大樹ノ法湯見あり佐尾番知知位 作を演説

多ク即刻涉初儀 大樹涉益々乃ハ且西宗子

法刀 代金百五十枚 七号乃ニ入リ

禁裏仙洞 涉使右志水甲斐宗秀七号乃ニ入リ

○ 立春之日答客口号 巳十二月廿一日

残腊雪花旧漫新 单瓢濁酒白眉嚙

诸君勸我毋多語 一朵疎梅自是春

立春後一日警龍和尚惠红梅 我亦贈梅花

香夢破窓際 年花回自梅

景陽迎翠暖 寒士上春臺

起居淹不聞 聊贈一枝梅

柳絮並清製 報来照梵臺

○ 雪の着く雪の降る日 大朝ある人の許より世は
述懐たゞる羨る其奥と

去るやいづる女をば羨る

と笑ふらる秘とぬりきりけり

けり雪のさしけりせあまの雪

ら又日月飛抜急よ淨潔して歳亦のまじ

き雪の浪立をけりぬ来りてをばよといはれ

羨るをばけりけりけりてあまおどり

えり雪月夜をばあたまけり

鐘召窓前夢 月残雪後峰

一声孤鶴恨 曆尾卷三冬

○ 暈思あつく所の栄目を暮るのせし人もかき
有る門前よ雀をばよけり雪をばよけり
世のりく然をきすささるるを眼前にけり
程出来の雪海にけりやあまの雪をば
かきけり者侍りけり

のむきと又けりけりいさむ

いさむいさむ誰のやけり

○ 歳暮とある世控人の暮るすけりて嵐をば
かりけり

吹すけり雪のさしけりけり

